

巻 頭 言

健康人間学コーディネーター
田原 明夫

大儀が不明瞭な戦争の後の、占領体制の下に自衛隊を派遣することの是非を巡って、世の中が大きく揺れているこの春、私どもの大学は、新しく発足した医学部保健学科に、新しい1回生を迎え入れるべく、準備に追われています。

昨2003年10月1日、京都大学医療技術短期大学部は、医学部保健学科として生まれ変わることとなりました。短期大学部は新2回生（現1回生）の卒業をまって閉学となることが決まっております。

京都大学医療技術短期大学部の、学科の壁を越えた共通の課題として追求されてきました「健康人間学」にまつわる、様々な視点からの提言や報告を収載してまいりました、この紀要別冊「健康人間学」も終巻を迎えることとなりました。

長年に亘って、広く学際的な立場から「健康」を科学することを目指して、様々な努力が積み重ねてこられていますが、未だ「学」として成立したとは言えないわけですが、課題はいよいよ明らかになりつつあると言えます。

克服されたと云われてきた感染症の世界においても、新しい疾患としてのSARSや、何十年ぶりの流行と云われる鶏インフルエンザが世界で猛威を振るっております。クロイドヘルツ・ヤコブ病の原因と言われるプリオンの流行も伴って、食品産業に大きな痛手を与えております。ペストやインフルエンザの歴史を見るまでもなく、世界のグローバル化の下に、一つの感染症が全世界の人間の日常生活を揺るがす事態を目のあたりにさせられます。

移植医療・遺伝治療・再生医学などの最先端医療の進歩は目覚ましいものがありますが、これらの「成果」は、「人類が未だ体験したことがない」事態を生み出すことも事実であります。それらの技術によって長らえることが出来た生命に、どのような豊かな生活を保証することができるかについては、これからのリハビリテーションに課せられた大きな課題であると言えます。

介護保険を中心とする福祉体制の大変換は、当事者主体を唱えています、医療におけるインフォームド・コンセントと同様、様々な障害を持つ人が、「自立」的な生活を自らのもとのするためには、援助する側のパラダイムの根本的な転換を求めています。

さらに、長期に亘る不況のもと、低成長社会の到来に伴い、働く場や家庭の変化も著しいものがあります。虐待・不登校・いじめ・若者の就職難・リストラの進行と失業率の増加、そして未曾有の中年男性の自殺者の急増、更には少子高齢化社会の到来に伴う様々な社会の変化など、病気や障害に苦しめない人たちの健康を巡る課題も山積しています。

医療・保健・福祉に携わる私どもが、その専門性を生かしつつ、ヒトの健康増進に資するための課題は、今後ますます増大することでしょう。

本誌は終巻を迎えますが、健康科学・健康人間学を学として確立するための営為は今後も一層発展的に続けられることは確かであり、そのために本誌が装いを新たに、再出発することを願ってやみません。